

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2017) 第17巻:77-78.

消化器心身医学研究会を終えて

奥村 利勝

学会の動向

消化器心身医学研究会を終えて

奥村利勝

平成 28 年 9 月 9 日と 10 日の 2 日間、札幌の北海道大学医学部学友会館フラテにて第 84 回消化器心身医学研究会を当番会長として担当した。同時に、第 18 回日本神経消化器病学会（会長 北大薬学部教授 武田宏司先生）、第 10 回機能性ディスペプシア研究会（会長 国立函館病院院長 加藤元嗣先生）、第 6 回 IBS 研究会と合同集会であった。参加者は計 274 名であった。規模がそれほど大きくないが、特別講演などの講師には大物が揃っていて、集会は非常に充実していた。システムバイオロジーの北野 宏明先生（システム・バイオロジー研究機構／沖縄科学技術大学院大学 統合オープンシステムユニット）、グレリンの発見者 児島将康先生（久留米大学分子生命科学研究所遺伝情報研究部門）、オレキシンの発見者 櫻井武 先生（筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構（WPI-IHS））などにも最先端の話題を提供していただいた。

今回の消化器心身医学研究会は私にとっては特別なものであった。それは、この研究会が 84 回と伝統あるものであるが、諸事情で最後の研究会となり発展的に解消され、来年からは、同様な研究成果が報告されるようになってきた日本神経消化器病学会に吸収されることになっていること。それ以上に、この研究会は私の恩師、故並木正義名誉教授（第三内科初代教授）が研究会の創設から深く関わってきた研究会であることである。すなわち、旭川医大第三内科として非常に思い入れのある研究会の幕引きを担当することで、単なる一研究会と違う重みがあった。この研究会では 10 年ほど前から、毎年発表演題の中から極めて優れたものを並木賞として表彰される制度があることからわかるように、並木教授が消化器心身医学の分野でいかに

多くの影響を全国に与えてきたかが理解していただけると思う。その血を受け継ぐものとして、この最終回の幕引きの当番を私にやれという指示を 2 年くらい前に研究会本部からいただき光栄なことであった。

幕引きのメモリアルなものにすべく、研究会の中では、一般演題に加え、「消化器心身医学のこれまでとこれから」と題したシンポジウムと代表幹事の先生による講演を企画した。シンポジウムの司会は私が担当し、シンポジストの中には、並木先生の一番弟子である、上原聡先生（本学 3 期生 上原クリニック開業 札幌）と愛弟子の野津司先生（10 期生 本学地域医療教育学講座）にも加わってもらった。各先生（本学以外の先生からも）からは並木教授の数々の業績や言葉が示され、いかにこの分野に貢献されたかが示された。上原先生は並木教授の最終講義の肉声を含めたプレゼンテーション、野津先生は、学位記念に並木教授からいただいたネクタイを締め、並木教授にこの講演を聞いてもらうつもりで話しますと言った。一般演題で並木賞候補演題に残った森谷満先生（12 期 北海道医療大学病院 心療内科教授）は並木教授が日本消化器内視鏡学会の会長講演で残した有名な言葉「内視鏡をやるものは心の内視鏡もやれ」の言葉をタイトルの一部に取り入れた大変印象的な講演を行ってくれた。幕引きの最終回となったが、この分野の研究の必要性が益々高まることは疑いなく、今後も神経消化器病学会の中でこの分野を発展させていくことが重要であるとの結論に至った。

私は元々、中枢神経と消化器の連関について深い興味があり、この分野の研究を卒業後一貫して行ってきた。今回、消化器心身医学研究会のこれまでを振り返

り、その重要性を再認識し、臨床的にも極めて大事で 灯し続けなくてはいけないと感じた。
あることが確認できた。

残念ながら、並木賞は旭川医大第三内科同門からの
選出はならなかったが、今後、この分野の研究の火を

平成 28 年 9 月 13 日